

みあげるおなかのそのしたで

「コッペさま、おはようございます」

ペこり、と頭を下げる小さな娘が、吾輩の前にいる。

——おはよう、フラワールの孫娘よ。

吾輩も挨拶を返す。だが下から見上げてくる視線からは、戸惑いしか感じぬ。 ふむ。

いまは平和なとき。フラワーも吾輩もその役目を終え、一息ついたころ。ひとの区切りで言つなら、二月の中程といったところか。

寒さに肩を窄めて歩く人々を透明な壁の向こうに見ながら、吾輩はいつものように、この緑の城で過ごしていたのだが。

「コッペさま？」

——なにかな？

わずかに傾げた首に向かつてまた返事をしたが、吾輩の声に気づいた様子はない。 やはり、か。

「このところ、毎日のように吾輩の前にやって来ているのだがな、この者は いや、さすがに『者』では礼を失するか。なにせ、吾輩とフラワーが成し得なかつたことをやり遂げたひとりなのだから。

「コッペ、さま」

——聞こえておる。続けなされ。

見上げてくる瞳に、光がある。何を望んでいるか、吾輩とて解らぬわけではない。だからこそ、何度も応えているのだが

「コッペ、さまああ〜」

ああ、泣かせてしまったか。

音にならぬ吾輩の声。吾輩にはどうすることもできぬことは理解しているが、それにしても、

——いつまでかかるものか、この娘の場合は

つい漏らしてしまった吾輩の言葉も、やはり目の前の娘に伝わる様子はなかつた。

3 みあげるおなかのそのしたで

「で？ 今日もつぼみちゃんには分かりませんでしたー、って？」

土曜の朝のえりかの部屋。温室から戻ってすぐ、わたしはそこで今日の報告をしていました。

そうしたら、ジャージ姿のえりかが椅子にすわって、ベッドに腰掛けたわたしを見ながら、目を見開いて言うんです。まるで、あきれたような感じで。

「そんな言い方しないでくださいよぉ〜」

わたしもついつい、口がとがってしまいます。だって、なんだか見下ろされてる感じがするんですから。

「事實は事実じゃない。もう、何日目だっけ？」

「6日、です」

わたしは思わず下向いちゃいました。学校の行き帰りに毎日通って、何度お話ししても、コッペさまの声は全然聞こえません。今日も、昨日も、おとといも

「それだけ通いつめてダメってことは あきらめたほうがいいんじゃない？」

「そんなぁ〜」

ぱつと顔を上げた先に、えりかのしょうがないなあ、って顔があります。

ええ、わかっているんです。えりかに悪気がないことくらい。月曜の朝、落ち込んで帰ってきたわたしを、無理やり部屋に引っ張ってきたときの、えりかの心配そうな顔、いまでも覚えてますから。でも

「別に、コッペさまだっけに気にしてないわよ。こないだ聞いてみたら『無理な人もいるとフラワーが言っていた』とか答えてくれたしさ。単に、つぼみがそーいっう人だった、ってだけじゃないの？」

でも、えりかには聞こえるんですよね、コッペさまの声。だからなんだか、

「えりかだって、偶然聞けるようになっただけじゃないですか」

ちよっとだけ、いじわるしたくもなります。

ほんとに偶然声が聞こえて、気になって話しかけてみたら通じた、って言っていて、そのときは、すごいなあって思ったんですよ。だけど、

「え と、そ、そりゃあそつだけどさ。でも、今は自由に話せるんだもん。そう、いう人じゃなかった、ってことでしょ」

「うう~~~~っ」

「こう何度も何度も言われるともう、うなるしかないじゃないですか！」

「はいはい。まったくもう、これが世界を救ったブリキユアだっていうんだからねえ」

「関係ありませんっ!!」

両手を振り回しながら立ち上がってる自分が、まるで画面の向こうにいるみたいに思えます。

わたし、子供すぎます。けど止められないんです。相手が、えりかだから

「わかつてるわよ、もちろん」

えりかの小さな声が聞こえたような、そんな気がしました。

って、騒いでたのはついさっきのことなんだけど。

しーん、って文字が浮かんできそうなくらい静かなあたしの部屋に、めくれちゃったふとん。まくらもどっか行っちゃってる ま、これはあとで探せばいいか。

「問題は、よ」

頭を下げて見直したっておんなじ。あたしの膝の上で、涙のあとつけた顔して寝こけてる子。

「どーすりゃいいってのよ、これ」

やれやれ。そりゃまあ、毎日考え事で眠れなくって、毎朝早起きしてりゃ、こうなるのもわかるけどね。

「ただ、その理由ってのがさあ」

5 みあげるおなかのそのしたで

「だいたい、つぼみはさあ、どーしてコッペ様と話すのにこだわるわけ？」

水曜日の朝、まだまだ学校には早い時間に、訊いてみたんだよね。2日ためしてダメなのに、なんなのかなー、って思ってた。

「ゆりさんも、いつきも言ってたじゃない。気にしないって」

あたしがコッペさまとしゃべれるようになったのは、みんなに言ってる。隠すことじゃないもんね。そしたらゆりさん、できれば話したいけど、聞かなくてもコッペさまはコッペさまだから、って言うてたっけ。いつきも つぼみだって、そんなときはうなずいてたのに。

あたしが訊いても、つぼみはベッドに腰掛けてしょんぼりしたまま黙ってる。毎度毎度、しょうがないなあ。そんじゃ、すっつと大きく息すつて、と。

「あーっ！ ひよっとして、またイケメンさんになってほしいとか!？」

「やーだあ、つぼみってばやあーらしいーんだあー」

「ち、ちがいますっつー!」

ふむふむ。ようやく顔あげたな。まったく、毎回考えるの、大変なんだぞ。

「だったらなによ。ほれほれ、言ってるんなさいな」

あたしがベッドのそばにイス持ってって、また下向きそつになるのを、顔近づけて止めてたら、やっと口が開いて、

「チヨコを 渡そうと思ってるんです」

「チヨコ?」

出てきた単語に、あたしはオウム返ししちゃった。

ああ、そういえば来週の月曜だっけ、バレンタイン。けどさあ、

「あげたいなら、あげればいいじゃん。手作りにしたって、つぼみ、お菓子つくれなかつたっけ?」

「作るのはいいんです。毎年お母さんと一緒に作っ

て、お父さんにあげてるから」

だよねえ。

コツペさまにチヨコっていうのは考えつかなくっただけど、モノがちゃんとできるんだったら、あとはあげればいいだけなんだもん。だったら、

「なんにも問題ないじゃん」

「でもでも、いつきが言ってたんですよ。犬にチヨコは毒なんだ、って」

あー。それ、あたしも聞いたことあるわ。犬や猫にはあげちゃいけない。ってちょい待ってよ。

「コツペさま、犬あつかい!?!」

「そうじゃありませんっ!?!」

「ごちっ!」

痛たたたっ! おアコぶつけちゃったよ。顔近づけたまま立ち上がるんだもんね。

「妖精が何を食べちゃいけないのか、わたしたち知らないじゃないですか!?!」

でも立ち上がったつぼみ、両手のこぶしを胸の前でにぎって、真剣な目であたしを見てる。痛い感じてないな、こりゃ。

それにしても、なるほどね。そりゃそーだわ。例のドリンクくらいしか、飲んでもとこ見てないもんね。あれ? でも、

「そんなの、つぼみのおばあちゃんなら、知ってるんじゃないの?」

あたしがひとこと言ったとたん、つぼみの顔がくしゃっ、てなった。

「それが」

今までにぎってた手でおアコをすりながら、涙ためてる顔。いまになって、痛くなったんだろっけど見てると、あたしまでちょっと不安になってきちゃうじゃない。

「それが?」

あたしが小さく声かけた瞬間、つぼみの肩が、かくと下がって、

7 みあげるおなかのそのしたで

「おばあちゃんに言われちゃったんです。それは
コツペさまに教えてもらいなさい、って」
立ったまま下向いた姿、あたしはしばらく見てら
れなかつたっけ

あの姿のと同じひろいおデコが、いま膝の上にあ
る。なんか、指でつつきたくなってきたぞ。

「ていつ」

ほんと、なーに欲張ってんだか、この子は。

「ちえいつ」

いいものいつぱい、いーっぱい持つてるくせに、
ちよつとはあたしにゆずりなさいってのよ。

「うりやつ」

「ん、んんうん」

つついた指の下で、つばみのおデコにちよつとこ
わがよつた。

はあ。わかつてるわよ。そんなこと、考えて
もないなんてさ。

「だから、最後は負けちゃうんだよねえ」

あたしは天井向いて、部屋の空気がなくなるくら
い大きく息すつてから、

「しょーがないっか!」

そのまま両手をつばみの背中にいれて、ゆっくり
ベッドに転がした。よし、起きてないな。

「あんまズルしちゃ、いけないんだろっけど」

立ち上がったら、ジャージの膝がちよつと冷やつと
する。

「ヒントくらいは、ね」

ぬれた膝をさわっていたら、勝手に言葉がこぼれ
てつた。

「コツペさま、ちわーっすー!」

つぼみを起こさないように、お母さんに頼んでから、あたしは温室にやってきた。

扉を開けて、一声かけたら、

——師走しゅうすい? すでに過ぎたと思っていたが?

いつもの場所にいるコッペさまが、あいかわらずのおじいちゃんおじいちゃん口調くちようで返してくれる。けど、やっぱりどっかズレてんのよね。

「ちがうちがう、あいさつよ」

——変わった挨拶だな。では師走、若き友よ。

ああもう、素直なんだかへんクツなんだか ま、それはいつか。でも、

「その呼び方、どうにかなんない? 『若き友』って それじゃ、区別つかないでしょ、つぼみにも聞こえるようになったらさ」

——なるほど、そのことで来たな?

「まあね」

あたしはコッペさまのすぐ前まで寄って、両手を腰に当てて答えながら、心のなかじゃあきれてた。すつ

ごくカンがいんだよねえ、コッペさま。こりや直球の方がいつか。

「あのね 声出して、話してあげてくれないかなー、って」

——フラワールの孫娘にか?

「さすがに、ちょっとね。見てらんない、っていつか。膝の上で泣いたまま寝られてみればわかるわ」

——ふむ。すぐ目の前で顔を見つめながら涙こぼされるのと、どちらがましかな?

あはは。そりゃそつか。コッペさまも被害者なんだよね。 はあ。

「ほんつと、つぼみは泣き虫なんだから」

——『泣き虫毛虫、挟はさんで捨てる』か。あたしのため息まじりの言葉の上に、コッペさま

の声が重なった。なに、それ?

——フラワーが子供のころの言葉だ。泣いた子供をからかう言葉だな。フラワーは嫌がっていたが。

「あたしも、イヤだな」

泣き虫って言ったの、あたしはちよつと後悔した。なんだか、つぼみが言われてる姿が浮かんじやったよ。

——吾輩は 以前は当然だと思っていた。だが、そら殿どのに諭さとされてな。花に悪いからと言って、むやみに命を摘むものではない、と。

その瞬間、いじめられてるつぼみの姿が頭から消えた。そらつて、つぼみのおばあちゃんの旦那さんだよ。つてことは

「つぼみのおじいちゃんも聞こえてたの、コッペさまの声？」

——そうだ。まあ、当然だがな。

当然聞こえる 当然!?

「それじゃ、コッペさまは知ってるんだね、聞こえる方法!!」

思わず大きくなつた声が、温室の中に響いてった。だってこれ、大ヒントだもん。あたしは単なる偶然だからわかんないし、この答えさえ教えてあげれば

——なに。もつと簡単に考えればよいのだ。お主のようにな。

つて、勢い込んで訊いたのに、これが答え? 「ひよつとしてコッペさま、遠まわしにあたしのことバカにしない?」

——とんでもない。それは吾輩には、いやフラワーにさえ到底どうも真似まねのできぬ、良いところだとも。若き友よ。

はあ。

ああ、ため息でちゃったよ。どーしても答える気ないみたいなんだもん。そりゃあ、ヒントがばっちり出てくるなんて甘いこと考えてたわけじゃないけどさ。でも、一番気に入らないのつて、

「やつばその呼び方、なんとかならない? つぼみがダメでも、いつきが聞こえるようになるかもしれないじゃない。こつちゃになつちゃつよ」

そう。せめてこんくらいは、直してほしいのよね。——まあ、ゆり君は名前で呼んでおるのだからな。

へ？ ゆりさんだけ名前？ 『若き友』 って呼ばないってことは、つまり

「ゆりさん、若くないってこと!?!」

あ、コツペさまの口がちよと開いた。笑ったのかな？ 珍しいなあ。

—— 吾輩から見れば、ゆり君のご両親とて若いくらいだ。ゆり君のことは、コロンに言われたのでそう呼んでいるに過ぎん。

コロン、って ああ、ゆりさんの妖精か。

「だったら、あたしのことも『えりか君』でいいよ。どうせ『若い』って言われるのがイヤになる頃だった仲間、やってんだろうしさ」

—— やはり当然だな。最初に聞こえるようになったのが、えりか君なのは。

え？

「なに？ なんか言った？」

—— いや、大したことではない。

なんだろ、なんだかコツペさまの顔が優しくなっ
たみたいなのがするけど ま、いつか。

「んじゃ、名前呼んでもらったところで、もっかいだけ聞けどさ。声で話すのって、やっぱダメ？」

コツペさまの目をじっと見ながらあたしが訊いたら、少しだけ静かになって それから、今までよりちっちゃな声が聞こえてきた。

—— すまぬ。実は、フラワーに止められていな

やっぱり、か。そんな気はしたんだよねえ。ちえ。

「あーあ、やっぱダメかあ。バレンタインは明後日だから、もう時間ないんだけどなあ」

ほわっ！

「な、なに？」

いきなり、あたしの目の前が緑色になった。よく見たら、全部コツペさま。体じゅうの毛が、みんな立っちゃってるんだ。

あ、ああ、おさまった。なんだったんだろ？

——悪かったな、えりか君。ちと寒気がな。

寒い？ 温室の中はそんなでもないけど。そついでば今晚は降るかもとか、天気予報で言ってたっけ。

そつ思いながら、温室の透명한天井を見上げてみる。なんだか黄色っぽくて、降りそつな空。

——なあ、えりか君。今晚、フラワーの孫娘をここへ寄越してはくれぬかな？

一緒に天井見上げながら、コツペさまがそつ言った。

「大丈夫かな？」

——フラワーの血を濃く継いでおるから、多分、な

思わずぼつん、とこぼれちゃったあたしの言葉は、コツペさまがすくってくれた。

「コツペさま、こんばんは」

土曜日の夜。真つ暗な温室を、おばあちゃんに借り

た鍵で開けて、明かりをつけながら、わたしはコツペさまにあいさつしました。

えりかの部屋でお昼まで眠つちやつて、起きたらいきなり言われたんです。コツペさまが、夜に呼んでいる、つて。それでやつてきたんですけど。やつぱり、声は聞こえません。

「コツペさま？」

椅子にコートを畳んでかけて、正面に立つてからまた呼びかけてみます。でも、やつぱりダメなんじゃないでしょうか

(いい？ 必ず行つて、キメてきなさい！)

そつ思つた瞬間、えりかの言葉が心に響きました。

「コツペさまがわたしを呼んでるのなら、きつとなにかあるはずですよ。ね、コツペさま。あら？」

顔を上げて目を見ようとしたのでですけど。コツ

ペさまの目、上を向いてますよ？

わたしも上を向いてみたら、透명한屋根に、ほこりみたいなものが付いていきます。屋根せんぶが、だ

んだんほこりっぽく いえ、これは、

「ゆき 雪!? た、たいへん! お花、しまわなくっちゃ!!」

たしかこの温室、いまは夜遅くならないとストーブ入れない設定になっていたはずです。少しでもあったかいところに移動させないと

——寒さに弱い花は、奥の右にまとまっておる。

「奥の右ですね。ありがとうございます!」

わたしが走っていった先には、南の国で咲く花たちが集まっていました。これを、近くの保温ハウスに連れて

「よし、これで大丈夫で、で くしゅっ!」

くしゃみと一緒に、体が震えました。いつの間になんかに寒くなっただんでしょう ああ、窓の外、白いものがどんだん大きくなっています。上を見なくてもわかるくらい雪の量です。

「寒さに弱いお花だけじゃなくて、みんな温めてあげないと ええと、ストーブのスイッチ、どこで

したっけ」

——それはまだよい。温めすぎはよくない。

え?

「そうですか? でも寒いと病気になるっちゃんいますけど」

——どこに咲いていても、多少なりと四季はある。ある程度の寒さは必要なのだ。フラワーに言わせれば『花は寒い時に力をつける』だったか。

はあ、なるほど 確かにむかし、そんなこと言うてましたね、おばあちゃん。

「そうですね。それじゃパイプに温水通すだけであれ?」

ちよつと待ってください さつきからわたし、誰と話してるんですか!?

——どうした? 手が途中で止まっておるぞ、フラワーの孫娘よ。休むならば、きちんと休まねばいかな。

おばあちゃんのことフラワーって、まさか

ぱっと立ち上がって、そのまま温室の奥から駆け
てくるわたしを、遠くの目がずっと追ってます。やっ
ぱり、この声　！

「コッペさま!!」

——吾輩の声は、心を同じくする友にしか届かぬ
待っておったぞ、つぼみ君。

すぐ前の地面に、べたんと座ってしまったわたし
を見下ろす視線が、はつきり声をつけてわたしに届
きました。やっと、やっと

——そろそろ、落ちていたかな？

コートを着込んで涙を拭きながら、目の前に椅子
を持ってきたわたしに、コッペさまが声をかけてく
れました。わたしがひとつ頷くと、

——先に言っておくが、ちよこなら吾輩は食べら
れるぞ。

って、ひとこと。座ろうとしてたわたしは、また
立ち上がっちゃいました。

「えりかが言ったんですか？」

——えりか君は、ばれんたいんが近い、と言った
だけだ。なに、フラワーも昔、同じことで悩んでい
たからな　吾輩にちよこを食べさせてから、だが。
ああ、わかりました。おばあちゃん自身が失敗し
たから　だから、本人に訊け、なんて言ったんで
すね。

「それじゃ、明日の日曜に作って持ってきます。こ
れでも、毎年作ってるんですよ」

わたしが右腕で力こぶをつくって見せたら、コッ
ペさまの目が、わたしの腕と目を見比べました。

——そうか、それは楽しみだ。ちよこなど口にす
るのは何十年かぶりだからな。

あら？

「おばあちゃんからもらってないんですか？」

——昔、手作りをそら殿と一緒に食したことがあ

るが、それ以後は遠慮している。

わたしは思わず頷きました。さつきから言葉聞いていて思ったんですけど、コッペさまってすごく真面目なんです。そら殿 おじいちゃんへの気持ちを込めたチョコを食べるのは、遠慮しちゃうよな。でも

「一度は食べたんですね。おいしかったでしょ、おばあちゃん手作りのチョコ♡」

あ、あれ？コッペさまが黙っちゃいました。また聞こえなくなっただけでしょうか。そう思っていたら、大きな顔がわたしの方に近づいて、

——残念だが、フラワーはちょこ作りが苦手だな。そら殿は気にせず食べた上に、自分の方が大きいと言って、割った一部を吾輩に分けてくれるのだ。あれには参った。

あはは。おじいちゃんったら、お茶目です。「あなたが、『大きさは愛情の差だ』なんて言うからでしょう、コッペ」

え？この声

「おばあちゃん??」

コッペさまの後ろの木の脇に、いつの間にかおばあちゃんが立っていました。ついさつきまで誰もいなかったはずなのに。まさか、最初から隠れていた、なんてことないですよな？

——なんだ、もう来たのか、我が友よ。

「これ以上しゃべらせたら、なに言い出すかわかったものじゃないわ」

ため息混じりに言いながら、おばあちゃんがわたしの横に来て、肩に手を置いてくれました。あつたかいです。

——つまらんな つぼみ君、今度またひとりであるといい。フラワーとそら殿の話なら山ほどあるからな。

「それ以上話したら、私の手作りチョコを食べさせるわよ、コッペ」

肩に乗ったおばあちゃんの手に入ったとたん、

地面が少しゆれました。よく見ると、コツペさまの体が毛羽立けぼだつてます。

——吾輩は心底、そら殿に敬意を抱いておるのだ。あ、あれを、美味うまそうに食べるのだからな

わたしが顔をあげたら、おばあちゃんと目があって 思わずふたりで吹き出しちゃいました。とりはだ、ですよ、これ。

——いや、二人とも笑つがな、本当に辛いつらのだから、あれは ああ、つぼみ君のちよこで、早く思い出を書き換かえたいものだ。

笑い声の中、コツペさまが真剣な目でわたしたちを見ています。本気、みたいです。

「それがつぼみに遺つ伝してないといいわね、コツペ」
ウイंकしながらのおばあちゃんの言葉に、わたしは力こぶで応こたえました。

さあ、頑張らなくっちゃ!!

—おしまい—